

【学術論文（査読無し）】

「ナガサキ」から「フクシマ」へ —本島等による「浦上燔祭説」の解釈をめぐる一考察—

菅原 潤*

Between *Urakami's* Holocaust and *Fukushima's* Catastrophe

Jun SUGAWARA

Abstract

Takashi Nagai insists that the atomic bomb exploding over Urakami Cathedral in Nagasaki is the notice of the providence leading to the end of World War II. Hitoshi Motoshima supports Urakami's Holocaust theory by the assistance of Masaru Fukabori's memoir in *Job in Ground Zero*. Accounting for the thought of Günther Anders, we can assert that the atomic bomb and Fukushima's catastrophe which the Promethean shamefulness (feeling ashamed of one's incompleteness in the face of the complete works that one has produced) produces crushes the humanism that has brought up this shamefulness over many years.

Key Words : holocaust, catastrophe, Promethean shamefulness

1. はじめに

改めて言うまでもないことだが、2011年3月11日に発生した東日本大震災では、巨大地震のみならずこれにともなう津波や原発事故が相俟って、およそ2万人の人命が失われた。1日のあいだでここまで大人数の死者が出たのは——このあいだにある大阪大空襲、伊勢湾台風、阪神大震災の被害などを軽視しているわけではないが——1945年8月9日に長崎の地に投下された原子爆弾の被害以来だといってよい。そしていずれの場合も原子力の問題が暗い影を落としていることには、十分注意すべきだろう。

こうした事情もあって、いわゆる「3・11」の問題を考察する際にふたたびクローズ・アップされてきたのが、『長崎の鐘』の著者として知られている永井隆である。たとえば文芸批評家の川村湊は近著において、被爆者である永井の発言によって原子力の

「平和利用」が正当化されたと指弾しているⁱ、哲学者の高橋哲哉は震災直後の石原慎太郎東京都知事（当時）の「天罰」発言の淵源が、永井の起草した原子爆弾合同葬弔辞にあることを指摘しているⁱⁱ。

この2人による永井への批判的な言及はそれぞれ、わが国の科学技術研究や政治風土を考察する上ではそれなりに有意義ではあるものの、後述する永井の起草した原子爆弾死者合同葬弔辞に限定していえば、カトリック信者としての彼の信仰心と関連する部分が看過されているように思える。一部でよく知られているように永井の弔辞は、一読するだけだと原爆を投下されたことを神に感謝するという、きわめて異様な内容であり、後述するような理由で「浦上燔祭説」と呼ばれて、これまでいろいろ論じられてきている。

本稿では永井と同じくカトリックの信者で、原爆投下と戦争責任について積極的な発言をおこなっている本島等元長崎市長の論考が昨年一冊の本にまとめられたことを受けて、本島の視点に加えて長崎にゆかりのある哲学者ギュンター・アンダーズの議論を参考にしながら永井の「浦上燔祭説」を再解釈し、

*長崎大学大学院水産・環境総合科学研究科

受領年月日 2014年5月30日

受理年月日 2014年7月4日

そこからポスト「3・11」の倫理のあり方を模索していきたい。

2. カトリック信者としての立場と広島との距離

—— 長崎市長としての原点 ——

一般的にいつて本島等は原爆投下の文脈よりも、昭和天皇の入院を受けて全国が自粛ムードになった1988年に「天皇の戦争責任」発言をおこない、昭和天皇の喪が明けた1990年に右翼関係者から銃撃を受けて一命をとりとめた人物として知られている。

このように紹介すると本島は、悲壮感を漂わせつつ真摯に国家権力と対峙する「良心的知識人」として見られがちだが、少なくとも長崎市に居住する前も数えて、数回本人のスピーチを生で聴いたことのある筆者の耳からすれば、本島には時折ユーモアを交えて分かりやすい語り口で政治を語る、温厚篤実な紳士の印象がある。しばらくは本島の評伝から適宜引用するかたちで、彼がどのようにして戦争責任と原爆投下の問題をつなげていったかを考察したい。

本島等は1922年に潜伏キリシタンの末裔として五島にて出生し、京都大学工学部を卒業後、長崎県議を経て1979年から1995年まで4期のあいだ。長崎市長をつとめた。長崎への原爆投下の知らせを本島は、熊本の西部軍管区教育隊に配属されたときに聞いている。

意外なことに本島が原爆の問題に取り組み始めたのは市長当選後のことであり、それも8月9日に読み上げられる平和宣言の原稿を作成するためなどの職務上の理由からである。ただしその場合でも本島の視点は、彼以前の4人の市長とは異なる視点を有していた。評伝の筆者である横田信行は次のように書いている。

戦後、本島以前の4人の市長は、程度の違いはあれ、全員が被爆体験を持っていた。被爆者ではないが本島は被爆者の代表として発言・行動することを求められる。壮絶な被爆体験が重すぎ、ともすれば原爆観は体験に固執しがちになるが、体験を持たない本島は第三者の視点を持ち得た。被爆者に近づこうとしながら立場の違いを認識させられ、乗り越えようと試行錯誤した。被爆地の代表としての経験、被爆地で不当な差別を受けてきた社会的弱者としての被爆者に対する共感、そして本島の根底にあるキリスト教の信仰。その教えにある自分を罪深く考え、「赦す」という概念が、複雑に絡み合いながら原爆観へ

と練り上げられていくⁱⁱⁱ。

こうした「第三者の視点」に立ったうえで、本島は次第に最初原爆投下地である広島市長とはいささか距離を置いた発言をするようになる。

次のような本島のいささか愚痴っぽい談話は、広島市長との距離を率直に語ったという点で注目すべきである。

長崎原爆病院初代所長の横田素一郎は「リンドバーグが大西洋横断に成功して、世界的に有名になった。2回目に横断に成功したのは誰であったかわからない」と言うんだ。うまいたとえだよ。広島は長崎より被害が大きく、被爆行政も進んでいた。被爆者援護の原爆医療法と原爆特別措置法の成立には広島の力によるところが大きかったし、それは感謝しなければならない。ただ、国内外の集会のあいさつで、広島からは「長崎」の言葉がないこともあった。こっちは「広島ともども」と言っているのに、当時は「お前ら家来じゃないか」という態度が見え隠れした。腹が立たなかったと言えば嘘になる^{iv}。

そこで本島はあえて、広島との違いを際立たせて長崎の独自性をアピールする道を模索し始めた。その始まりとなるのが、朝鮮人被爆者の問題である。この本島からの問題性的対し、予想通り広島市長の反応は冷たかった。

広島、長崎の県・市の市長と議会議長で作る広島・長崎被爆者援護対策促進協議会で、朝鮮人被爆者問題も議題に入れようと言ったら、荒木・広島市長に「広島と長崎の問題を話す場だぞ」と怒られた。荒木さんは年上だし当選回数も多い。僕はいつも子分のように後ろをついていった。気分屋で海外出張では、口をきいてもらえなかったこともあったなあ^v。

こうしてみると、今となっては先駆的ともいえる被爆者におけるマイノリティの問題を重視する本島の姿勢は、後述する「1970年代パラダイム」のもとで活動する論者の関心にもとづいてのものだというより、広島との違いをアピールする本島の長崎市長としての作戦に由来するものだと考えるべきだろう。そしてこの態度は、1992年に在韓被爆者の実態調査のための訪韓を受けて、第6回国際非核自治体会議での挨拶における「日本政府は我々日本人はどうして被爆者を外国人被爆者と日本人被爆者を差別する

のでしょうか」^{vi}という発言に結実することになるが、これに前後して「天皇の戦争責任」発言の内外の反応を受けた本島の変化にも留意しなければならない。

3. 「天皇の戦争責任」発言の波紋

ひと頃話題になった本島の「天皇の戦争責任発言」の全文は次のとおりである。

お答えをいたします。

戦後 43 年たって、あの戦争が何であったかという反省は十分できたというふうに思います。外国のいろいろな記述を見ましても、日本の歴史をずっと、歴史家の記述を見ましても、私が実際に軍隊生活を行い、特に、軍隊の教育に関係をいたしておりましたが、そういう面から、天皇の戦争責任はあると私は思います。

しかし、日本人の大多数と連合国側の意思によって、それが免れて、新しい憲法の象徴になった。そこで、私どももその線に従ってやっていかなければならないと、そういうふうに私は解釈をいたしているところであります^{vii}。

一読したところ、とりわけ当時の自粛ムードを知らない若い世代の目からすれば、ここで本島はしごく常識的な発言をしていると解されることだろう。現在でも太平洋戦争の開戦の責任は誰にあるかが議論になっているが、本島は自分の軍隊生活の経験から旧憲法下での統帥権の独立の文脈で天皇の戦争責任を捉えており、しかもこの問題は新憲法の制定によって免責されたと考えている。それゆえこの発言が終戦から 40 年以上も経ってから天皇に戦争責任があるかどうかの問題を蒸し返したものだと思えることには、相当の無理があると言わなければならない。

けれどもこの発言の波紋は非常に大きく、長崎市役所はたびたび右翼団体からの強い抗議を受け、他方で本島の発言を指示する市民が「言論の自由を求める長崎市民の会」を結成した。本島本人に送られてきた手紙は最終的には 1 万通を超え、それらの一部は東京の出版社径書房より『長崎市長への 7300 通の手紙』と銘打たれて公刊された。

こうした余波を受けて本島は市長 3 期目の選挙戦を、これまでの 2 回推薦を受けてきた自民党ではなく、公明党の推薦と社会党の支持を受けて戦うこととなった。当時の心境を本島は次のように語る。

「本島は左だ」なんて言う人も多かったが、弱い立場の人の力になりたいと思っていただけ。右も左も意識していなかった。社会党や共産党の革新勢力は天皇戦争責任発言以降、僕の言動を支持してくれた。かつての身内から批判され、敵から応援されるのは何か不思議な感じだった。僕の立場は変わっていないが、風の吹くまま放っておいて気づいたら、左に取り残されたというのが正直な感想さ^{viii}。

「左に取り残された」と「僕の立場は変わっていない」という表現が併存していることに注意したい。本島は政治家であるから、自分の発言が政治的に左に位置することは重々承知している。にもかかわらず彼は自分の立場は変わっていないことを強調する。これは一体どういうことを意味するのか。

ここで先ほど挙げた外国人被爆者の問題と「天皇の戦争責任」発言を併せて考えれば、本島は日本人は被爆者を理由に第二次世界大戦における被害者意識を言い立てるべきではなく、アジアに対する加害者意識をもつよう呼びかけると解釈することができる。被爆者の気持ちに寄り添うことができるかどうかの話を抜きにしていえば、こうした考え方はたしかに政治的に左のものではある。

けれどもこの 2 つに加えて、アメリカによる原爆投下を赦す発言を本島がしている事実も考慮すれば、彼の思考の射程が思いのほか深いことが思い知らされる。

4. 原爆投下を「赦す」ことの背景

原爆投下を赦す発言としていちばんまとまっているのは、1996 年の軍縮問題資料の冒頭にある次のような一節である。

被爆者をはじめ日本人の心の中に原爆投下に対する限りない憎しみの念が燃えさかっていることだろうが、広島、長崎の被爆者たちは、被爆 51 年目の今日、アメリカの「原爆投下」を「赦す」とははっきり言わなければならない。

被爆者をはじめ日本人は、心を冷静にして、アジア、太平洋戦争の侵略と加害の深い反省と謝罪を考えながら、原爆投下によって、無差別に大量虐殺された原爆の犠牲者に代わって、アメリカの原爆投下を「赦す」といわなければならない。

太平洋戦争は、日本の真珠湾攻撃にはじまり、広島、長崎の原爆投下によって終わった。日本人は、

真珠湾の奇襲攻撃をアメリカに謝罪し、アメリカは日本への原爆投下を日本に謝罪しなければならない。

日本人が、謝罪しない限り、アメリカは原爆投下は正当であったと言い続けるだろう。

私たち日本人が、原爆投下を赦さなければならない大きな理由は、中国はじめアジアの人たちが、日本の15年にわたる侵略と加害を「赦す。そして決して忘れない」と言っていることである。日本人が中国はじめアジアの人たちに赦しを請い得る条件は、アメリカに原爆投下の無差別、大量虐殺を赦すということである^{ix}。

注意しなければならないのは、アメリカによる原爆投下を「赦す」にあたって、日本による侵略戦争の被害者である、中国をはじめとするアジア諸国の立場を考慮していることである。先に触れたようにこの発言の4年前に本島は、在日韓国人の被爆者の補償を問題にしている。それゆえ本島は、被爆者の差別を決しておこなわないようにする考えから出発して、視点を次第に国内から国外へと向けていくうちに、国内の被爆者を特別視する見方を補正するようになり、それが「原爆の犠牲者に代わって、アメリカの原爆投下を「赦す」という発言にいたったと考えられる。

ここでアジアからの視線という観点から連想されるのは、先にも触れた「1970年代パラダイム」の問題である。この語は術語としてまだ熟していないと思えるのでかいつまんで解説すると、社会学者の小熊英二が大著『1968』で導入した概念である。小熊によれば、70年代前後に吹き荒れた学生運動は、当初は当時若者だった団塊の世代の自己確認運動だったが、1969年に国会に上程された出入国管理法の成立を阻止すべく在日中国人・台湾人の有志により華青闘が結成された。その華青闘により学生運動の主体をなす日本人の若者が1970年に自らの戦争責任を厳しく指弾されたことで「1970年代パラダイム」の枠組が形成された。この指弾を受ける前の日本人の若者は戦後生まれであるがゆえに「戦争を知らない子どもたち」として歴史から自由な活動をしたつもりだったが、そういう若者にも「民族的責任」や「原罪」が存在すると華青闘は訴えるのである^x。

これ以降の社会運動は、華青闘の提起したアジアの視線をばねにして展開していったと言ってかまわない。小熊の言を借りれば「マイノリティ差別や戦争責任への注目、アジアへの経済進出への批判、天

皇制の問題化、公害や障害者問題などへの着目、「管理社会」への抵抗、リブとその延長としてのフェミニズムなど、90年代に出現したゲイ運動をのぞけば、現在いわゆる「左派」ないし「サヨク」の主張として認知されているものは、敗戦直後に生まれた「戦後民主主義」よりも、70年7月から10月にかけて原型のできたあの「1970年パラダイム」だといってよいだろう^{xi}。戦後50年を受けて書かれた加藤典洋の『敗戦後論』に対して高橋哲哉がおこなった、15年戦争で犠牲になった日本人の死者とアジアの死者のいずれを先に追悼すべきかをめぐる論争や、現在も日韓のあいだでくすぶっている従軍慰安婦問題も、こうした「1970年パラダイム」の範囲内と考えていいだろう。

それでは、ここで問題にしている原爆投下を赦すとする本島発言も、「1970年パラダイム」と同じ文脈に載せることは許されるのだろうか。先に挙げた「天皇の戦争責任発言」、外国人被爆者への補償をうったえる姿勢や、アメリカの謝罪よりも日本の謝罪を先にすべきだとする主張には、たしかに「1970年パラダイム」じみたものが認められる。

けれども「原爆投下によって、無差別に大量虐殺された原爆の犠牲者に代わって」アメリカを赦すべきだという本島の態度には、語弊があるかもしれないが、いささか感傷的に思えるアジアへの責任の念とは別次元の心情が見られるのではないだろうか。本島が市長時代に毎年8月9日の原爆投下の時間からの1分間の黙祷をささげた後に、平和宣言を読み続けた事実を重く受け止めなければならない。市長としてのそうした公務をおこなう一方で、読みようによっては日本人の被爆者につらくあたるこの発言を、どのように受け止めるべきなのか。

ここで注目したいのは、今は廃刊された雑誌『論座』に寄稿した論文における、本島の次のような発言である。

原子爆弾は市民の日常生活の上に不意に投下されたというが、その「日常生活」は異常な日常でした。こともなきのどかな「晴れて朝から暑い日」に突如核兵器が襲ってきたのではないのです。

被爆せしめられるにいたった人々の絶対多数は、積極的な戦争協力者、鼓吹者、遂行者でした。国民をあげてのショーヴィニズム（狂信的愛国主義）の中で被爆者だけが例外であったと考えるのは、事の道理にあいません。戦争の最後に被爆したのですから。

戦争を体験した世代からの言葉をそれだけ聞いたことでしょう。

しかし、「あの戦争さえなかったら……」という表現は絶対多数でした。「私たちみんなの力での戦争さえ許さなかったら……」という表現は稀有でした^{xii}。

ここで本島が示唆しているのは「1970 年パラダイム」において前提されている被害者としてのアジアとか、日本からの解放を手助けたアメリカの立場というような外交的な問題よりも、被爆にいたるまでの歴史的経緯を自らが被爆した現実と不可分に捉えるという厳しい姿勢である。そこから出てくるのは通常の慰めや癒しの言葉とは別次元の、あえてその名を挙げればアイロニカルな言語である。そしてそういう言語を用いた先達者として、本島は永井隆に注目するのである。

5. いわゆる「浦上燔祭説」について

それでは手短かに永井隆について紹介しておきたい。永井は 1908 年に松江市にて出生、長崎医科大学（現長崎大学医学部）に入学後は当初内科を専攻する予定だったが耳の病気が理由で断念し、放射線医療を専攻することとなった。戦時中はフィルム不足のため肉眼での透視による X 線検診を続けたことが原因で白血病にかかり、原爆投下の 2 か月前の診断では余命 3 年と宣告された。

1945 年 8 月 9 日の原爆投下の際に永井は爆心地からわずか 700 メートルしか離れていない勤務先にいたが、昏睡状態におちいりながらも一命を取りとめた。けれども大学在学中に結婚した潜伏キリシタンの末裔である妻は死去し、そうしたなかで懸命な救護活動をおこなった。自らの療養のため設けた庵の如己堂にて死去したのは、1951 年である。

これから検討したい永井の発言は、原爆投下から約 3 カ月後の 1945 年 11 月 23 日におこなわれた、原子爆弾死者合同葬弔辞である。かなりの長文になるが、これまで激しい論争があった経緯を踏まえて、全文を引用することとする。

昭和 20 年 8 月 9 日午前 10 時 30 分ごろ大本営に於て戦争最高指導会議が開かれ降伏か抗戦かを決定することになりました。世界に新しい平和をもたらすか、それとも人類を更に悲惨な血の戦乱におとし入れるか、運命の岐路に世界が立っていた時刻、即ち午前 11 時 2 分、一発の原子爆弾は吾が浦上に爆裂

し、カトリック信者 8 千の霊魂は一瞬に天主の御手に召され、猛火は数時間にして東洋の聖地を灰の廢墟と化し去ったのであります。その日の真夜半天主堂は突然火を發して炎上しましたが、これと全く時刻を同じうして大本営に於ては天皇陛下が終戦の聖断を下し給うたのでございます。8 月 15 日終戦の大詔が發せられ世界あまねく平和の日を迎えたのでありますが、この日は聖母の被昇天の大祝日に当っております。浦上天主堂が聖母に捧げられたものであることを思い起します。これらの事件の奇しき一致は果して単なる偶然でありましょうか？それとも天主の妙なる摂理でありましょうか？

日本の戦力に止めを刺すべき最後の原子爆弾は元来他の某都市に予定されてあったのが、その都市の上空は雲にとざされてあったため直接照準爆撃が出来ず、突然予定を変更して予備目標たりし長崎に落すこととなったのであり、しかも投下時に雲と風とのため軍事工場を狙ったのが少し北方に偏って天主堂の正面に流れ落ちたのだという話を聞きました。もしもこれが事実であれば、米軍の飛行機は浦上を狙ったのではなく、神の摂理によって爆弾がこの地点にもち来られたものと解釈されないこともありますまい。

終戦と浦上潰滅との間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪惡の償いとして日本唯一の聖地浦上が祭壇に屠られ燃やさるべき潔き羔として選ばれたのではないのでしょうか？

智恵の木の実を盗んだアダムの罪と、弟を殺したカインの血とを承け伝えた人類が同じ神の子でありながら偶像を信じ愛の掟にそむき、互に憎み殺しあうて喜んでいた此の大罪惡を終結し、平和を迎える為にはただ単に後悔するのみでなく、適当な犠牲を捧げて神にお詫びをせねばならないでしょう。これまで幾度も終戦の機会はあったし、全滅した都市も少くありませんでしたが、それは犠牲としてふさわしくなかったから神は未だこれを善しと容れ給わなかったのでありましょう。然るに浦上が屠られた瞬間始めて神はこれを受け納め給い、人類の詫びをきき、忽ち天皇陛下に天啓を垂れ終戦の聖断を下させ給うたのであります。

信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかったわが浦上教会こそ神の祭壇に捧げられるべき唯一の潔き羔ではなかったのでしょうか。この羔の犠牲によって今後更に

戦禍を蒙る筈だった数千万の人々が救われたのであります。

戦乱の闇まさに終り平和の光さし出ずる8月9日、此の天主堂の大前に焰をあげたる嗚呼大いなるかな燔祭よ！悲しみの極みのうちにもそれをあな美し、あな潔し、あな尊しと仰ぎみたのでございます。汚れなき煙と燃えて天国に昇りゆき給いし主任司祭をはじめ八千の靈魂！誰を想い出しても善い人ばかり。

敗戦を知らず世を去り給いし人の幸よ。潔き羔として神の御胸にやすたう靈魂の幸よ。それにくらべて生残った私らのみじめさ。日本は負けました。浦上は全くの廢墟です。みゆる限りは灰と瓦。家なく衣なく食なく、畑は荒れ人は少し。ぼんやり焼跡に立って空を眺めている2人或は3人の群。

あの日あの時この家で、なぜ一緒に死ななかったのでしょうか。なぜ私らのみ斯様な悲惨な生活をせねばならぬのでしょうか。私らは罪人だからでした。今こそしみじみ己が罪の深さを知らされます。私は償いを果していなかったから残されたのです。余りにも罪の汚れの多き者のみが神の祭壇に供えられる資格なしとして選り遺されたのであります。

日本人がこれから歩まねばならぬ敗戦国民の道は苦難と悲惨にみちたものであり、ボツダム宣言によって課せられる賠償は誠に大きな重荷であります。この重荷を負い行くこの苦難の道こそ罪人吾等に償いを果たす機会を与える希望への道ではありませんまいか。福なるかな泣く人、彼等は慰めらるべければなり。私らはこの賠償の道を正直に、ごまかさずに歩みゆかねばなりません。嘲けられ、罵られ、鞭打たれ、汗を流し、血にまみれ、飢え渴きつつこの道をゆくとき、カルワリオの丘に十字架を担ぎ登り給いしキリストは私共に勇気をつけて下さいましょう。

主与え給い、主取り給う。主の御名は讃美せられよかし。浦上が選ばれて燔祭に供えられたることを感謝致します。この貴い犠牲によりて世界に平和が再来し、日本に信仰の自由が許可されたことを感謝致します。

希わくば死せる人々の靈魂天主の御哀憐によりて安らかに憩わんことを。

アーメン^{xiii}。

おおまかに言ってこの弔辞は、1945年8月9日午前11時2分に長崎市の浦上天主堂付近の上空で原爆が投下されたことが、単なる偶然事とは見なさずに、これを太平洋戦争の終戦の決定と江戸時代より弾圧

されてきた長崎のカトリック信者に対する神の試練として取り扱う前半の部分と、原爆の惨禍後も生き残った自分たちを聖書にならって「罪人」と規定し、苦難の道へと導いた神に感謝を捧げる後半の部分に分けられる。原爆の惨禍を聖書で言われる「燔祭」

(ホロコースト)と形容する点に注目した哲学者高橋真司は、この弔辞を「浦上燔祭説」と呼んで批判的に言及した。後述するように本論は高橋の批判から距離を置くが、「浦上燔祭説」という言い方自体は適切だと判断する。

それでは高橋の展開する「浦上燔祭説」とは一体どういうものか。高橋によれば、この弔辞で永井が①そもそも長崎原爆をどう見るか、②原爆の死者をどう見るか、③生きのびた被爆者は何をなすべきかを問いかね、そして①から③の問いについてそれぞれ摂理、燔祭、試練と答えたとする。まず①だが、これは弔辞の前半の部分にあるように、原爆が投下された当日の夜中に終戦が決定されたこと、聖母の祝日に終戦の大詔が発せられたことを「天主の妙なる摂理」として解釈する。次に②では、原爆による犠牲者は神の祭壇に供えられた汚れなき子羊だとする。そして③では、これまで長崎在住の潜伏キリシタンの弾圧の歴史を踏まえて、原子爆弾を神によって与えられた試練だと考えるのである。

こう整理したうえで高橋は、「浦上燔祭説」によって長崎の被爆者は、二重の免責をおこなったとして批判する。その主要な部分を引用しておく。

長崎への原爆投下がもし神の摂理によるものであれば、無謀な15年戦争を開始遂行し、戦争の終結を遅延させた、天皇を頂点とする日本国家の最高責任者たちの責任は免除されることになる。同様に、原子爆弾を使用したアメリカ合衆国の最高責任者たちの責任もまた免除されることになる。永井隆は『ロザリオの鎖』や『長崎の鐘』(日比谷出版社、1949年1月)が公刊されたとき、そこに盛られた浦上燔祭説がこうした責任の追及を封ずることになるのを自覚していた、と私は思う。「何が私たちをこんな涙と灰の谷に突き落したか」を問うて、かれはこう答える。

「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか？——私たちだ。おろかな戦争を引き起こした私たち自身なのだ。あの活気にあふれていた街を、大火葬場にし、いちめんの墓原にしたのは、だれだ——私たちだ」(『長崎の鐘由来』)。原爆投下の責任と、原爆投下を将来した日本の侵略戦争開始遂

行責任の追及を、永井隆はこのようなレトリックを用いて封殺するのである^{xiv}。

冒頭で触れたように震災後の論壇で高橋哲哉と川村湊は、永井批判を展開した。高橋が石原の天罰説との関連で、川村が原子力の「平和利用」の文脈で取り上げるといふ違いがあるものの、いずれの議論も明治以降の天皇制国家と米国の戦争責任を免責したという高橋真司の論点の延長上で考えることができる。それゆえ永井の理解は、高橋による「浦上燐祭説」批判をどの程度乗り越えるかにかかわっていると言ってよい^{xv}。

それでは、こうした永井の「浦上燐祭説」を本島等はどのように受け止めたのか。なぜなら本島はすでに述べたように、文字通り命がけで昭和天皇の戦争責任に言及しているので、永井が免責したと高橋が言う所の2つの事象のうち、少なくとも1つは永井の考え方と相容れないと考えられるからである^{xvi}。

6. 父の骨と猫の骨

― 原爆投下の「非人間性」について ―

本島の永井理解を考察する上で有意義なのは、被爆者の証言をカセットテープに録音して収集した『原子野の「ヨブ記」』の筆者である伊藤明彦の追悼文で触れた次のような一節である。

『原子野の「ヨブ記」』で最も紙幅が割かれたのが、深堀〔勝〕さんの被爆体験だ。父、新婚の妻、最愛の妹と静かに暮らしていた31歳のクリスチャンは8月9日、爆心の自宅に駆け戻り、家族3人が原爆に打たれたことを知る。そこで彼は思わず、口ずさんだ。

「主与え、主取り給うなり。主の御名は賛美せられよ」〔中略〕

永井隆は「原爆は神の御摂理」と言い、現在まで批判にさらされている。私はこの「原子野の『ヨブ記』」を読んで初めて、永井批判はカトリックが持つとするヨブの心持ちに対する外部の無知に起因しているのではと思ひ至った。永井は、原爆を肯定するよう世間に呼び掛けたのではない。カトリックとしてヨブの心持ちを語っただけなのだ。

長らく私は永井批判の言説に不満だったが、批判に対抗する言葉を持ち得ずにいた。そんな私に答えを与えてくれたのが伊藤〔明彦〕さんだった^{xvii}。

先に挙げた「浦上燐祭説」でも「主与え給い、主取り給う。主の御名は讃美せられよかし」と一文があることから、ここでの本島の発言はとりあえず、カトリックの立場からの心情の吐露だと受け止めることができる。けれども深堀の証言から永井批判に対する反論の糸口を見出したという本島の意見表明は、カトリックの心情に収まりきれない問題を孕んでいるように思われる。そこで深堀の体験談でとりわけ印象的な箇所を取り上げて、本島の永井理解の真意を探ることとしよう。

本島が問題にする深堀勝は原爆投下当時、三菱長崎工業学校の教諭をしていた。長崎では広く知られていることだが、「深堀」は「片岡」と「田川」と並んで潜伏キリシタンの家系の姓で、深堀自身もカトリック信者である。大浦天主堂に近い三菱の寮で寮生の指導をしている最中に、深堀の居住する浦上に原爆が投下されたことを知り、深堀は急いで家族の無事の確認をしに行く。

壕をでたところで髪をよもぎのようにふりみだした近所の奥さんにあいました。

『きょうは助かった者はだれもないんですよ。お宅のお父さんも奥さんも家にいたし、妹さんもおそらくだめでしょう』

腰の骨をぬきとられたような瞬間です。わたしはへなへなと座りこんでしまいました。腰がぬけるといふことはあんなことをいうのでしょうか。

そのときうかんできたのが旧約聖書『ヨブ記』のなかのかねがね好きであったヨブのことばです。

『主与え、主取り給うなり。主の御名は賛美せられよ』

義人ヨブになぞらえられるはずもないわたしの魂ですけど、その有名なことばをいつのまにか口ずさんでいました。

『めでたし聖寵みちみてるマリア。主、御身とともにいます。御身は女のうちにて祝せられ、御胎内の御子イエズスも祝せられ給う』

空をまっ黒くおおう雲をながめながら、朝夕ささげる聖母マリアへの祈りを終えたとき、わたしは畠の一隅にすっきり立っていました^{xviii}。

本島が感動したのが、以上挙げた深堀の回想談である。本島自身の弁によれば、本島は以前より深堀とは知己の間柄だったにもかかわらず、こと被爆体験については、伊藤が録音した音声によりはじめて聞いたとのことである。こうした事情を聴くと、つく

づく被爆証言をすることの重みということが改めて感じさせられる。

証言の中身に戻ることにしよう。永井の弟子であり、後に永井に批判的になった秋月辰一郎が「ついていけない」^{xix}とした、永井と同様の旧約聖書ヨブ記第1章第21節からの引用が、被爆から4カ月後の合同葬どころか、被爆当日の一カトリック信者によりなされていることを重く受け止めるべきである。

このことの意味はカトリック信者であるどころかクリスチャンですらない筆者にかぎらず、自分たちは無宗教だと考えている多くの日本人にとって分かりにくいことだと思うので、しばし本島の真意を離れて、この後に出てくるキリスト教の信仰の有無を超えた深遠な次元が読み取れる次のような証言に注目することとしよう。

その翌日せめて骨なりとひろおうと思ってまたわが家にかえりました。焼けあとをあさると白い頭蓋骨がでできます。

『ああ、お父さん。ここにいたのか。よかった。よかった』

拝みながらもえのこりのバケツのなかにたいせつに納めました。足やその他の骨をさがしているうち、

『さてよ。父の足がこんなに小さいだろうか。人間の頭蓋骨は学校の標本で見たことがあるけれど、それにしても小さいぞ。鼻から口にかけても人間の骨格ではないじゃないか。なあんだ。これは三毛猫の花子の骨だ。ええい』

あんなときで常識をはずれてしまっていたのでしよう。わたしは猫の骨を父の骨とまちがえかけてしまったのです。花子にはわるいけれど、バケツをひっくりかえしてその日は掘るのをやめてしまいました^{xx}。

つまり自分の父親の骨だと思って拾った骨が、実は飼い猫の花子の骨であることに気づいたという情景である。この骨が本当は深堀の父親のものか、それとも飼い猫のものかは確かめようもないが、ここで大事なのは、かけがえのない肉親の死を悼む感情が飼い猫を思う感情とパラレルに語られていることである。たしかに深堀はこの骨が父親の骨でないとあって「バケツをひっくりかえし」たけれども、他方で「花子にはわるいけれど」とも思っている。いわば人間の命と動物の命が同一の地平で捉えられ、そしてその視点から人間の命の重みが相対化されているのである。

ここで深堀は肉親と涙の対面をしているのではなく、父の骨と猫の骨を間違ってしまった自分の愚かさを、あえてこの表現を用いればアイロニカルな筆致で描いている。こうした深堀の視点は、原爆投下はなるほど非人間的で許しがたい行為ではあるが、その原爆を製造した「人間」とはいかほどのものであるか、また骨になってしまった後の人間と動物にはいかなる違いがあるかと、読者に問いかけているようにも読める。そして「非人間的」になり動物と区別のつかなくなった地点で、原爆投下の倫理的問題を捉え直そうとする視線が浮かび上がってくる。

こうした論点をもとにして深堀と、そして永井が引用したヨブ記の「主与え、主取り給うなり。主の御名は賛美せられよ」が何を示唆するのかを——両者および本島の意図からやや離れることになるかもしれないが——原爆について深い思索をしている哲学者ギュンター・アンダースの議論を踏まえて考察したい。

7. アンダースの「羞恥の哲学」

ギュンター・アンダース、本名ギュンター・シュテルンは、現在では著名な政治哲学者ハンナ・アーレントの最初の夫としてその名が知られているが、ナチスによるホロコースト計画の責任者であるアドルフ・アイヒマンと、広島に原爆を投下したパイロットの双方と意見交換をし、それを公表したユダヤ系の行動する知識人として、本論では特筆すべき存在である。

彼は第4回原水禁世界大会に出席のため1958年に広島と長崎を訪れている。そのときの印象を記したエッセー『橋の上の男』のなかでアンダースは、長崎の平和祈念像についてなかなか興味深いコメントを残しているが^{xxi}、そのアンダースが主著『時代おくれの人間』のなかで独特の原爆論を展開している。

まずアンダースは、人類が原爆を製造したことで「アポカリプスの主人」になったと言う。「アポカリプスの主人」とは耳慣れない言葉だが、要するに原爆を製造することで、人類は自分自身を滅亡させる主体になったということである。このことはユダヤ・キリスト教の伝統からして、まったく画期的だとアンダースは言う。

非情に奇妙に思えるかもしれないが、全能は、われわれの手に移って初めて現実には危険なものになるように思われる。以前にはいつもノアやロトのよう

な人間がいた。われわれの目には自然的に見えようが超自然的に見えようが（こういう区別自体が二次的になったように思われる）、これまでの超能力はすべて恵み深いもののものであった。そのどれにしても単に部分的に脅かすのみで、人々や町、国、文化といった個別的なもの「だけ」を消し去ったにすぎない。――「われわれ」を人類だと理解すれば――超能力は、われわれをいつも大事にしてくれた。宇宙的な（凍死のような）破局を考えた一握りの自然哲学者や、相変わらず（いつも起こりはしなかった）世界の終末を待ち望んでいた少数のキリスト教信者を除けば、全体的な危険という考えがもともと存在していなかったのも不思議ではない^{xxii}。

いかにもユダヤ系の思想家らしいアイロニカルな議論だが、ここでアンダースが注意を促しているのは、原爆を製造し投下した問題は従来の弁神論的思考から一線を画しているということである。

弁神論とはライプニッツの造語で、神が創造したはずの世界になぜ悪が存在するのか、そしてその悪の責任は神にあるのか、それとも神の被造物である人間にあるかを論じる考え方である。弁神論は人間が目下直面する災禍が「悪」と認識されても、その「悪」はより大きな「善」を実現するために許容されるべきだと主張する。こうした「脱悪化」^{xxiii}の原型は、本島や深堀が話題にするヨブ記までさかのぼれると思われるが、その場合の「悪」は、アンダースの言い方を借りれば「人々や町、国、文化といった個別的なもの「だけ」を消し去った」にとどまるので、全体的に見れば人間を「大事にしてくれた」と言える。この場合の人間はいわばアポカポリスの客体だったのだが、原爆を手にして客体ではなく「主人」になると、状況が一変するとアンダースは考える。

まずアンダースは、原爆が手段ではないと考える。「手段」という考え方には「目的」という考え方が前提され、その目的が達成されれば「手段」の意味合いは終結することが想定されるが、原爆ではこうした手段と目的の連関が失われているからである。いわば手段がもたらす「効果はいわゆる目的より大きいばかりか、一切の目的設定を疑わしいもの」とすると予想され、手段の今後の使用を疑わしいもの^{xxiv}とするのである。そうすると「目的」を主とし「手段」を従と考える従来の手段と目的の関係が逆転し「手段を製造することがわれわれの存在の目的」となり「役立たず」と思われる物質を手段の世界で立

派に役立つもの」^{xxv}にするということになる。

こうした原爆についてのアンダースの考察は、抑止力を名目に米ソ間の核兵器製造競争をエスカレートさせた論理を提示したものとして注目に値するが、こうした「手段が目的を正当化する」考え方の背後にあるのが「プロメテウスの羞恥（prometheische Scham）」という聞き慣れない概念である。『時代おくれの人間』の訳者である青木隆嘉の解説によれば、まずは人間の製造した製品の完璧さと、これに比すれば何ら完璧ではない人間性のあいだに「プロメテウスの落差」が生じてきて、この落差を埋めるために人間は完璧ではない人間を無理やり完璧な製品へと近づける衝動が起こるという。こうした「自分の作品の（恥ずかしくなるほど）高度な品質に対する羞恥」^{xxvi}を、アンダースは「プロメテウスの羞恥」と名づける。

青木自身が示唆するように、こうしたプロメテウスの羞恥を産み出す「プロメテウスの落差」の発想の元になったのはマルクス主義的な「上部構造」と「下部構造」の関係があると思われるが、最近生命倫理で取り沙汰されているバイオテクノロジーを人体改造に適用するエンハンスメントを推進する考え方にも「プロメテウスの羞恥」の発想が認められることからして、今後さまざまな分野で応用可能な概念だと言える。

原爆に関する考察に戻るが、自らの制作物に対して感じる羞恥心は、常識的には本当の羞恥心ではないと言えるだろう。アンダースもこの点に賛同して「プロメテウスの羞恥」の背後には「主体による世界支配の可能性を説く」「自負が働いている」と見なす。そしてこの自負のそのまた背後には「根源からの離脱の隠蔽」があると考え、こうした「自負の哲学」に対して自らの「羞恥の哲学」を対置する。

この「羞恥の哲学」が何であるかについてアンダースは多くを語っていないが、先に触れた原水禁に出席した際の幾つかの印象批評を介すれば、その一端を知ることができる。そしてその「羞恥の哲学」を介して、本島が深堀の談話から受け取ったメッセージの真意が見えてくる。

8. 「恥じらい」から「賛美」へ

――「浦上燔祭説」の再検討――

『橋の上の男』においてアンダースは、面会した被爆者がおしなべて「まるで地震とか、洪水とか、太陽の自然爆発でも語るような態度で語っている」

ことに奇異の感情を抱いた。それは彼がユダヤ人として「ヒトラーをにくむ」感情とは正反対のことであり、その原因についてあれこれ思案した後「今日では、およそ敵というものが、いかなる意味においても見定めることができなくなった」ということに思っていた。その理由としてアンダースは、原爆を投下したアメリカ人パイロットという「下手人」と、投下される下方に住む広島と長崎の住民という「被害者」のあいだに「巨大な距離」があることを主張する。

行為の下手人と、その被害者とが、たがいに巨大な距離をへだてて存在している結果、後者は、自分がある行為の犠牲者である、という事実を理解することすら、不可能となるだろう。過去においては、およそ“行為の場所”は、同時に、下手人のいた場所であると同時に、犠牲者のいた場所であった。すなわち、行為の主体と客体とは、同一の場所に存在していた。しかし、いまや、この二つの要素は、二つの場所に分かれ分かれに存在するようになったのである。この、分裂の現象が、今日の人間における意識の分裂という現象を決定づける“存在の条件”の一つである。〔中略〕

このような、知覚の分裂状態に対応する現象が、すなわち、今日のわれわれに見られる、情緒の分裂状態である。それは、おれの知らないことは、おれには関係がない、知らぬが仏、という状況である。今日のわれわれは、行為の準備をしながら、しかも、そこからでてくる結果について、すなわち犠牲については、なにも知らぬ。あるいは、どこかで、だれかがわれわれを目標とした行為の準備をしても、そのことを知らぬ。したがって、こうした準備や行為は、われわれにとって、なんら切実な実感として訴えるものをもってはいないのである。このような、いわば消化不能、といった状況が、この広島の場合にも当てはまるだろう。だから、これら被爆者たちも、憎悪ということを知らないのではないか^{xxvii}。

そこで彼は「下手人」と「被害者」を結びつけるものとして、独特の「恥じらい」の考え方を提示する。

今日の恥じらい。それは、人間が人間にすでに加え得た行為に対する恥じらいである。したがって、それは、現在もなお、人間同士がおたがいに加える行為に対する恥じらいである。すなわち、われわ

れがたがいに加える行為に対する恥じらいである。つまり、自分もまた人間の一人である、ということに対する恥じらいである。

この恥じらいは、なくてはならないものだ。しかし、あれをやったひと、すなわち下手人であり責任者である人びとは、今日ぜひとも必要なこの恥じらいを感じてはいない。それどころか、この恥じらいが存在することすらも気がついていない。だから、だれか、かれらの代理をつとめる人間が必要である。すなわち、かれらにかかわって、この必要な恥じらいを感じる人間がでて来なければならぬ^{xxviii}。

こうした「代理をつとめる人間」がアンダースであるのは、言うまでもない。そして「この恥じらい」がある種の「拒絶の感情」から生まれることを強調する。

被爆者たちの話をきいたとき、われわれが反射的に感じたのは、一種の拒否の感情だった。すなわち、われわれの同胞にこれほどの苦痛をあえてあたえた連中とおなじ人間の仲間としてわれわれ自身をみとめることはおことわりだ、という感情だった。

誤解しないでほしい。ここで大切なのは、この、恥ずかしいという気持ちの中にある排他的な要素それ自体なのではない。むしろ逆に、この排他的なものの共有によって生じる共通性、つまり、新しく生まれた連帯感こそが、大切なのである^{xxix}。

ここで注意したいのは、アンダースが広島と長崎の「被害者」と直面して自分が「下手人」のアメリカ人と同じ欧米人であることを恥ずかしく思うと同時に、この「恥じらい」の感情を介して自分を欧米人と日本人を含む「人間の一人」という「同じ仲間」と認識したうえで「人間の手によって、おなじ仲間である人間に加えられたことが、ふたたびくりかえされないように、おたがい努力しよう」と呼びかけていることである。ここには「アメリカ人であろうと、ドイツ人であろうと、ロシア人であろうと、ビルマ人であろうと、あるいは日本人であろうと」同じ人間だというヒューマニズムが前提されている。けれども先に述べたように、そのアンダースは『時代おくれの人間』において、人間が自らの製造する完璧な製品に何とか完璧ではない人間を近づける「プロメテウスの羞恥」を論じていたはずである。そうした非人間的な「恥じらい」を育んだのも、同

じヒューマニズムではないのか。

そこで、深堀勝の回想談が強い意味合いをもつようになる。繰り返すが、深堀は原爆が投下された翌日に廃墟となった自宅の周辺で父のものと思ってバケツに集めた骨が、実はネコの花子の骨だと思ってバケツをひっくり返した。原爆の破壊力は人間と人間以外の動物の外的な区別を失わせるくらい強大だったことが、ここで含意されている。そうした極限状態にあつては、人間と人間以外の動物を区別して行動すること自体が不可能だというわけである。けれども深堀はこうした状況にありながら、ヨブ記を引用して「主の御名は賛美せられよ」と言う。アンダースの『時代おくれの人間』の議論を念頭に入れつつ、この議論の流れを整合的に理解するには、そういう「プロメテウスの羞恥」を産み出すような「人間性」とはいかほどのものか、そういう「人間性」に固執する自分はいかほどのものか、このことを神は原爆投下によって私に教えたのであり、それゆえ神の名は賛美されるべきだということではないのか。

つまりは原爆投下という行為は「行為の下手人と、その被害者とが、たがいに巨大な距離をへだてて存在している」ため、それぞれ自分が「加害者」なり「被害者」なりを意識できない構造にあること、そういう原爆を製造したのが「手段が目的を正当化する」「プロメテウスの羞恥」であること、そしてその「プロメテウスの羞恥」を産み出した「人間性」を原爆により完膚なきまでに粉砕した結果を受けて、人間の愚かさを認識したことの喜びが永井の「浦上燔祭説」であり、また深堀の回想談から本島が「永井批判への答え得た」としたことではないのか。

9. 「ナガサキ」から「フクシマ」へ

― むすびにかえて ―

冒頭で述べたように、本論の狙いは本島等による永井隆の「浦上燔祭説」の解釈から、福島第一原発事故の問題にアプローチすることである。その割には原発事故について今まで何の言及もしていないのではないかと不審に思われるかもしれないが、長崎への原爆投下に限定した今までの議論を綿密にたどれば、その方向性は自ずと明らかになったのではないだろうか。

改めて論点を整理すれば、本島は原爆投下の事実をもって日本人の被爆者を特別視することを拒否し、当時強制連行された朝鮮人被爆者に対する対処を呼び掛けると同時に、アメリカによる原爆投下を「赦

す」べきだと言明した。この議論の流れは一見すると「1970年パラダイム」的な日本によるアジアの植民地支配に対する悔恨の念の表明と受け止められがちだが、『原子野の「ヨブ記」』に掲載された深堀勝の回想談を介して「浦上燔祭説」を評価した姿勢も考慮すれば、本島の視線は太平洋戦争および15年戦争の歴史的評価の範疇を超えて、アンダースの言う人類の「プロメテウスの羞恥」の産み出した問題圏から問題提起したと捉えることができる。それによれば原爆は、自分よりも自分の製造した作品を完璧だと思う「プロメテウスの羞恥」の最終的な行先であると同時に、それが投下することでこの「プロメテウスの羞恥」を育んだ「人間性」そのものを再検討する機会を与えたと考えることができるだろう。

この理屈はもちろん、福島原発事故にも当てはまる。なるほど原発事故によって福島県大熊町周辺の住民を含んだ日本人は、多大な損害を受けた被害者であるが、同時に「プロメテウスの羞恥」の産み出した原発の「安全神話」にとらわれ原発を誘致し増産してきたのも、大熊町周辺の住民および日本人であり、この「安全神話」の行きつく先がいかにばかりのものかを、われわれは「原発再稼働」と「脱原発」の対立を超えて強く受け止めなければならない。事故の現場から半径20キロ以内の警戒区域（事故当時）では深堀が証言したような人の骨とネコの骨の見分けがつかない状況ではないが、今でも津波の被害にあった人骨と、酪農農家の緊急避難によって餓死した牛の骨が散乱していることから、原発事故が環境問題でもあることも認識しなければならない。

このように考えると、発言の当時ユダヤ人団体から抗議を受けた本島の「ヒットラーの600万人のユダヤ人大虐殺は人類史上の犯罪であるが、アメリカの原爆投下もまた人類史上の犯罪であって、ユダヤ人大虐殺は過去の犯罪であるが、原爆は未来に向かった犯罪である」^{xxx}とする発言も、別の意味合いをもつようになるだろう。アンダースの言によれば原爆投下はユダヤ人のホロコーストとは違って、「下手人」と「被害者」がそれぞれ加害者意識と被害者意識を有するには「巨大な距離」があるため、両者を巻き込むような「恥じらい」の感情を誰かが引き受けなければならないのであり、また放射能の内部被曝の問題や廃炉に向けての少なくとも2世代にわたる作業の工程を考えると、原爆投下と原発事故の衝撃は時間の経過とともに癒されるどころか、むしろ事態の深刻さが増す問題として考えられるべきで、

この点でユダヤ人のホロコーストとは別次元で対処されるべきだろう^{xxx}。

それにしても感銘を受けるのは『原子野の「ヨブ記」』に収められた無名の男性の証言から、「浦上燐祭説」を読み解く鍵を見出したと述べる本島の謙虚さである。これまでとだいぶ文脈が異なるが、政治思想家の橋川文三が2・26事件の引き金となった相沢事件の発生当時無名の将校だった末松太平の『私の昭和史』を評して「私個人の関心からいって、何よりも眼を洗われる思いがしたのは、篇中をとおしあられる相沢三郎の姿である。私の読んだ限り、相沢中佐の人間像は、その敵も味方も、私たちのなとくのゆく形で伝えてはくれなかったと思う。私は彼の姿をどのようにとらえるかに、ひそかに苦勞していた。多くの記憶がその点私を釈然とはさせてくれなかった。末松さんの文章だけが、私にはいま、相沢の人間像をはじめて定着させてくれるものであった」^{xxxii}とする姿勢に通じるものがある。戦後も70年近く経つ現在、戦争をどう伝えるかが党派を超えた大問題になっているが、本島と橋川のように大思想家や著名な知識人の見解に左右されず、かといってルポルタージュ的な手法に全面的な信頼を置くことなく、無名の市井の発言から柔軟に時代の空気を読み取るセンスが今後重要になるのではないだろうか^{xxxiii}。

ⁱ 川村湊『原発と原爆―「核」の戦後精神史―』河出ブックス、2011年、111～126頁。

ⁱⁱ 高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』集英社新書、2012年、138～145頁。

ⁱⁱⁱ 横田信行『長崎市長本島等伝 ^{ゆる}赦し』にんげん出版、2008年、110頁。

^{iv} 同書、124頁。

^v 同書、124～125頁。

^{vi} 平野伸人編・監修『本島等の思想』長崎新聞社、2012年、50頁。

^{vii} 同書、59頁。

^{viii} 横田前掲書、184頁。

^{ix} 平野前掲書、137～138頁。

^x 小熊英二『1968（下）―叛乱の終焉とその遺産―』新曜社、2009年、236～276頁。

^{xi} 同書、839～840頁。

^{xii} 平野前掲書、157～158頁。

^{xiii} 永井隆『長崎の鐘 付「マニラの悲劇」』勉誠出版、2009年、92～95頁。なおこのテキストは、1949年に日比谷出版社より刊行されたものの復刻版である。占領下の刊行のためGHQの指令により日本軍の蛮行を記したドキュメントが併載されていることに注意したい。

^{xiv} 高橋真司『長崎にあって哲学する―核時代の死と生』北樹出版、1994年、201～202頁。

^{xv} 山内清海は永井生誕100周年記念の講演会で永井の撰理説についての弁護をおこなっているものの、「浦上燐祭説」の抱える戦争責任論にまで踏み込んでいるとはいえない（『永井隆博士の思想を語る』ゆりり書房、2009年、7～71頁）。

^{xvi} 他方で本島は久間章生防衛大臣のいわゆる原爆「しょうがない」発言については、昭和天皇が1975年におこなった発言をもとに擁護している。2007年8月14日付の『長崎新聞』でのインタビューのなかで本島は昭和天皇を高く評価しており、彼のなかで昭和天皇への敬愛と戦争責任の追及が両立していることに注意したい。

^{xvii} 平野前掲書、215～216頁。〔 〕内は引用者による補足。

^{xviii} 伊藤明彦『原子野の『ヨブ記』―かつて戦争があった―』径書房、1993年、235～236頁。

^{xix} 秋月辰一郎『長崎原爆記―被爆医師の証言―』日本図書センター、2010年、224頁。なおこの秋月の発言に高橋真司は基本的に賛同している（高橋真司前掲書、227頁）。

^{xx} 伊藤前掲書、237～238頁。

^{xxi} 篠原正瑛訳『橋の上の男―広島と長崎の日記―』朝日新聞社、1960年、163～164頁。

^{xxii} 青木隆嘉訳『時代おくれの人間 上―第二次産業革命における人間の魂―』法政大学出版局、1994年、253頁。

^{xxiii} 「脱悪化」については、すでに主題的に論じる機会があった（拙稿「3・11以降の弁神論的思考とシェリング」『シェリング年報』第21号、2013年、27～28頁）。

^{xxiv} 青木前掲訳書、262頁。

^{xxv} 同書、264～265頁。

^{xxvi} 同書、386頁。

^{xxvii} 篠原前掲訳書、114～115頁。

^{xxviii} 同書、95頁。

^{xxix} 同書、10頁。

^{xxx} 平野前掲書、140頁。

^{xxxi} このことはユダヤ系の哲学者であるバーンスタインが、アーレントがカントの提唱した「根源悪」を「悪の陳腐さ」として捉えるのとは別次元の悪論の展開を示唆するものである（阿部ふく子他訳『根源悪の系譜―カントからアーレントまで―』法政大学出版局、2013年、366～368頁）。。
^{xxxii} 『橋川文三著作集5』筑摩書房、1985年、194～195頁。

^{xxxiii} これとはだいぶ印象が異なるが、新進気鋭の社会学者である古市憲寿が近著のなかで人気女性アイドルグループももいろクローバーZとの座談会で、平成生まれの女性の歴史認識を語らせているが（『誰も戦争を教えてくれなかった』講談社、2013年、294～323頁）、歴史に「素人」な人間の歴史語りに耳を傾ける点で古市の姿勢は、本島にとっての深堀や橋川にとっての末松のような意味を有するものとして、高く評価されるべきではないだろうか。

[付記]本稿脱稿後、長崎新聞の森永玲氏の仲介により本島等氏本人と面会し、本島氏から直接自らの発言の真意を確認することができた。本島氏および、私のために面会の段取りをつけてくださった森永氏に心から御礼を申し上げたい。